会報

新日本美術協会

事務局
千葉県柏市大津ヶ丘
3-17-17-401
森屋治三方
TEL04-7191-6760

編集委員
本部　小高峯夫
富岡ネム
大石　亨
京都　四方公子
広島　藤原清二

次号平成25年2月予定

三十六回展を省みて

実行委員長　永野　信

リニューアルオープンした東京都美術館に二年ぶりに戻って開催しました三六回展は大勢の近在委員と会員の皆さんのご協力によって十月十一日無事終了しました。厚く御礼申し上げます。

これまで二年間の上野の森美術館では作品の大きさと点数を制限しておりましたが今回の会場は旧都美館の時より会場が三三㌫広くなりましたので大きさの上限を百五〇号まで、二点出展可とし、会場における展示では二段かけのないようにしました。

最も重要な事は昨今の世情から会員並びに一般公募の作品が期待したとおり集まるかどうかでしたが結果的には作品が大きくなったことと二点出展者が多く壁面を埋めることができました。しかし一般公募作品においては前年と比べても三〇㌫少なく、今後の重要課題として拡大策を講ずる必要があります。

一方、今回は都美館への復帰記念として作品の図録を作成しました。これまでは平年より搬入を一ヶ月早めて作っていましたが今回は搬入即撮影し、六日後に仕上げると言う超スピードで完成したもので担当された土屋委員をはじめこれをサポートされた皆さんのご努力によるものであります。

当会は今後四年間にわたり、この期日に、この会場で新日美展を開催することになっています。より良い作品をマットが敷かれた広い会場に綺麗に展示して、来場者が喜んでくださるよう務めなければなりません。

そのためには今後の搬入、審査、展示、並びに会期中の受付、場内案内に関わる担当者の増員が必要となります。東京近在支部の委員ならびに会員の更なるご支援をお願いしなければなりません。

新しい都美館は「アートへの入り口」を標榜し、展覧会を楽しく鑑賞し、子供たちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品するなど開かれた美術館にしたとしています。新日美展もこうした目的に沿った展覧会にしていこうではありませんか。

会長が元気な姿を見せました

心臓手術後の長い療養を経てようやく体調を取り戻した中尾会長が、新装なった会場へそして表彰式に姿を見せました。

体調を取り戻したとはいえ、本来の体力ではないので表彰状は山下副審査委員長が代読し、授与を会長が行うことになった。

会長は、三十六回展出品作を、ベッドの脇にイーゼルを置き、体調の良い時に少しずつ描き進め、五十号の作品を描き上げて出品されたといいます。

このあくなき制作意欲こそ、後に続く者は肝に銘じ見習うべきではないでしょうか。

三十六回展　講評（要旨のみ掲載）

外部審査員　芳賀文治先生

三年ぶりにリニューアルした展示会場は明るく、広く、天井が高く非常に見映えのいい展示会場になっていると思います。今回は二点出品された方が多く見受けられ、作者の制作意欲を感じました。中でも会友や一般の方に意欲あるいい作品があるように思いました。北海道から車を運転してご自身の作品を搬入した若い方があると伺いましたが、この様な意欲こそ買うべきと思います。指導者は若い人が多く出品されるよう考えて頂きたい。

作品個々の講評は会場で言いましたが、基本的には絵画では形、色、構成で訴えたいことが見る人にどれだけ感動を与え、思いを伝えられたかが評価になると思います。

工芸は素材が多彩であり、素材の特性を生かした技術・技法を駆使し、実用と様（鑑賞性）の両面でどれだけ高められたかが評価ポイントになると思います。

芳賀先生によるギャラリートーク

三十六回展審査所感

副審査委員長　絵画部門　山下利隆

編集部から審査所感（絵画部）を求められたので、私の思ったことを書かせていただきます。自然の草花も動物達も覚悟を決めて、冬越えへと思考を切り替えています。

さて、本題ですが、外部委嘱審査委員の中野中先生、芳賀文治先生両氏を始め中尾会長以下十四名の内部審査委員にて、油彩、水彩、水墨画などの、二百十五点に及ぶ作品を二日間にわたり、当会伝統の丁寧で厳正な審査のうえ、入選者及び受賞者を選び出す作業を致しました。

結果三十六名の力作、そして平凡ではあるが作家の心が感じられる秀作を新日美第三十六回展の受賞作品に決定した次第です。選に外れた人の中にも審査員総意による点数状況は甲乙つけがたい絵が随分ありました。次回発表作品に期待したいものです。

平面に一筆一彩を載せれば「え」ですが、せっかく大好きになった絵ですから、色彩の圧倒的状況、自己と自然の見識的症状の有無などを無意識に受取り、筆先から筆元までを活用し、優れた奏者の様な音色の絵を表現できたならば、私は一人で乾杯するでしょう。では、皆様次回第三十七回展までごきげんよう。

副審査委員長　工芸部門　富岡ネム

一言でいえば「審査すること」は難しいに尽きる。こと工芸に関しては扱う素材の多さと「工芸」についての解釈がそれ自体多岐にわたること、審査員個々が分野以外の作品を審査しなければならないなど、責任は重い。もとよりいわゆる工芸と言われる分野とは異なる造形美術・彫刻も工芸部門に入っている。にも拘わらずかつてより出品数が減少しているのも気になる。まずは来年に向けて募集要項に詳細な内容、具体性を掲げたいと思う。インターネットを通じて応募してくる作家が多くなる時代、門戸を広く、魅力的な工芸部門にしたい。

現状はというと会員数もさることながら、会員は本展には万難を排して取組み、出品して欲しい。在籍していても出品せずというのは残念に尽きる。

審査員は毎年同じ顔ぶれも良し悪しである。工芸部会員が今より多くなれば審査員数も増え、また違った角度や視点から審査が出来る。審査員も交代することで新たな挑戦に向かう。さらに外部から工芸全般を審査出来る評論家を招致する等々。こう考えていくと結局のところ人数である。より多くの出品者を募る努力もまた会員の義務だと思う昨今である。